

興福寺旧境内の調査(平城第539次)

今回の調査地は、観光客でにぎわう東向商店街の入り口に位置します。東向通りはその名が示すように、かつては道を挟んで東が興福寺の築地、西には民家が東を向いて並んでいたと言われていました。調査区は通りの東側、興福寺旧境内の西辺にあたり、ビル建設にともなって9月16日から10月2日まで発掘調査をおこないました。調査面積は約50㎡です。

調査区内は後世の開発により、北半分が大きく削平されていましたが、南半分で中世から近世にかけての遺構を検出しました。主な遺構は、大土坑^{だいどこう}2基、廃棄土坑^{うめがめ}2基、埋甕^{うめがめ}1基です。

大土坑は、東辺が調査区外まで広がり、大きさは5.1m以上、深さは0.7mあり、埋土からは「興福寺」銘がある軒丸瓦・軒平瓦を含む中世後半の瓦が大量に出土しました。調査位置から、興福寺西面の築地等に用いられた瓦が一括して捨てられた可能性があります。

また、検出した2基の廃棄土坑は、地面に穴を掘り不要品を廃棄したいわゆるゴミ穴です。いずれも江戸時代前期の土坑で、大きい方で径1.8m～3.0m、深さは1.8mあり、北西隅には土坑から脱出するための足かけ穴が残っていました。ここからは17世紀前半の陶磁器^{はじき}や土師器^{はじき}小皿がまとまって出土しました。そのほかにも、下駄や漆器椀、箸、桶、折敷^{おしき}等の木製品や胡桃や桃、瓜の種等、種実類も多く出土しています。

今回の調査では、古代の遺構は確認できませんでしたが、興福寺旧境内西辺における中世末期の様相の一端を知るとともに、近世前期の豊かな生活をうかがえる重要な資料を得ることができました。

(都城発掘調査部 石田 由紀子)



廃棄土坑掘り下げの様子(東から)